

学童期における親との生活時間は 児童の人格形成に影響を与えるか

島村隼史

筆者は学童保育でアルバイト経験があり、子供の性格や人格が親と似ていることが多く、親から得られない愛情や欲求を大人（先生）に求めることが多々ある。子供にとって親の影響は大きく、親との生活時間が児童の人格に影響を与えるのではと疑問を提示した。性格形成における遺伝の影響や、パーソナリティ（人格）の理論などから先行研究を行った。その結果、「親とともにする生活時間が短い児童たちは、その人格形成においてネガティブな影響を与えるのか」という仮説を提唱した。

その後実際に A 小学校の B 放課後児童クラブで調査を行った。調査方法としては主に参与観察を実施し、その手法を応用し、視覚的な判断を数字に変換することで起きていた現象を可視化することを試みた。さらに家族構成をカテゴリー化し、「母子、父子家庭の兄弟あり」「母子、父子家庭の兄弟なし」「夫婦家庭の兄弟あり」「夫婦家庭の兄弟なし」4 つに分け、「行動」「言動」「指示の受け入れ度」について調査を行った。

結果として、児童の人格や性格は少なからず家族からの影響を受けているということが分かった。また親との生活時間が人格形成においてネガティブな影響を与えるのではないかと仮設したが、実際の結果は仮説通りではなく、親の影響はもちろんのこと、それ以外にも兄弟間の関係という家族構成そのものが大きな影響を与えていたが、ネガティブな影響かそうでないかは項目ごとに様々であるという結果が得られた。

筆者が調査をした際に、本当に子供を育てたいと感じているのかと疑問符が付く家庭も多々あった。その理由として「親御様の仕事が早く終わっているはずなのに迎えに来ない」や「仕事が休みである、また仕事に行く雰囲気がないのにも関わらず預けに来る」などだ。これは推測の域に過ぎず、真実かどうかは当事者にしかわからないことである。しかしこのような事象が起きている可能性があるという事実は重く受け止めなくてはいけないのではと感じた。

近年では政府が幼児教育、保育の無償化を行い、子供を産みやすい環境づくりを積極的に行っている。しかしどれだけ子供を産みやすい環境を作っても、それは少子化の根本的な解決とはなっていないと感じる。根本的な解決とは大人が自ら子供を育てたいという想いが湧き出てくるようにすることが大切なのではないかと考える。

学校や保育施設など、教育機関や保育施設という概念はあるものの、親の自由な時間を増やす親のための合理的な場所にせず、第 2 の居場所として親とともに協力し合い、子供を養育していくことができればそれがより良い環境づくりに繋がり、結果として子供の笑顔が増え、良い生活環境や先生の労働環境の改善にもつながるのではないかと考える。